

研究報告

看護職者の多重課題遂行における
疲労感および達成感と
充実感に関連する要因の検討

小口翔平¹⁾，松永保子²⁾

¹⁾ 清泉女学院大学，²⁾ 信州大学

長野県看護大学紀要

第23巻別刷

2021年3月

看護職者の多重課題遂行における疲労感 および達成感と充実感に関連する要因の検討

小口翔平¹⁾, 松永保子²⁾

【要 旨】 目的：看護職者の多重課題遂行における疲労感や達成感・充実感の有無と看護実践能力、自己効力感、認知的熟慮性の違いを明らかにする。方法：看護職者277名を分析対象とし、看護実践能力を看護実践の卓越性自己評価尺度（NESCP）の総得点および7つの下位尺度、自己効力感を一般性セルフ・エフィカシー尺度（GSES）、認知的熟慮性を認知的熟慮性—衝動性尺度を用いて評価し、多重課題遂行における疲労感や達成感・充実感の有無による、各尺度の得点の差をMann-Whitney U検定を用いて検討した。結果：多重課題に疲労感を感じる看護職者は、NESCPの総得点（ $p=0.015$ ）やNESCPの下位尺度の情報を収集し活用する能力（ $p=0.001$ ）、GSES（ $p=0.003$ ）の得点が低く、達成感・充実感を感じない看護職者は、NESCPの下位尺度の患者を尊重する能力（ $p=0.031$ ）やGSES（ $p=0.039$ ）の得点が低かった。認知的熟慮性については、有意差がみられなかった。結論：多重課題遂行において、疲労感を感じる看護職者および達成感・充実感を感じない看護職者の看護実践能力や自己効力感が低いことが示された。看護実践能力については、疲労感と達成感・充実感で異なる能力が影響することが示唆され、看護職者の個性性に合わせた支援が必要であると推察された。

【キーワード】 看護、多重課題、看護実践能力

はじめに

昨今、入院患者の高齢化や在院日数の短縮化、医療の高度化に伴い、看護職者の業務量は増加しており、看護職者の多重課題による負担は増すばかりといえる。先行研究では、看護職者にとって多重課題に対応することが困難であること（那須，2008；今井ら，2016）、看護職者の多重課題が、業務遅延（渡邊ら，2018）やインシデントの原因になること（小西ら，2015）が示されるなど、看護職者が負担なく効率的に多重課題を遂行するための支援方法や教育方法が求められている。

看護職者の多重課題の遂行には、一つひとつの課題に適切な優先順位をつけて対応することが必要であり

（西野，2012）、それには、看護実践能力が必要と考えられる。看護の実践に関わる能力にはさまざまな要素があり、亀岡（2009）は看護実践能力の下位尺度として、「連続的・効率的な情報収集と活用」、「臨床の場の特徴を反映した専門的な知識・技術の活用」、「患者・家族との関係の維持・発展につながるコミュニケーション」など7つの下位尺度を示している。また、自己効力感と課題遂行能力の間には正の相関があること（東條ら，1987）、熟慮的な看護師とそうでない看護師のケアの考え方に違いがあること（渡邊ら，2015）が指摘されており、看護実践能力、自己効力感、認知的熟慮性が多重課題の遂行や捉え方に関連することが推察される。実際に、小口ら（2020）の研究では、多重課題の遂行に困難を感じる看護職者の看

¹⁾ 清泉女学院大学

²⁾ 信州大学

2020年10月5日受付

2021年2月9日受理

護実践能力、自己効力感が低く、認知的熟慮性が高いことが報告されている。一方で、多重課題は疲労を伴う業務の一つであることや (Steege et al., 2015)、多重課題は働くことの魅力の一部であり、多重課題がないことで空虚感や充実感の欠如を感じる看護師がいること (Forsberg et al., 2015) が報告されており、多重課題の遂行には疲労感や達成感・充実感が伴うといえる。しかし、これまでの多重課題に関する研究は、多重課題遂行における困難感に着目した研究が多く、多重課題遂行における疲労感、達成感や充実感に着目した研究は少ない。また、職業継続意思に達成感が関連すること (撫養ら, 2014) が報告されていることから、本研究において、多重課題の遂行における、達成感・充実感の要因を検討することには意義があるといえる。

以上のことから、本研究は、看護職者が負担なく効率的に多重課題を遂行するための支援方法や教育方法を検討するために、多重課題遂行における疲労感および達成感や充実感の有無による、看護実践能力、自己効力感、認知的熟慮性の違いを検討することを目的とした。

用語の定義

1. 多重課題：「看護職者の日常生活援助や診療の補助などの業務が、限られた時間の中で重なること (小口ら, 2020)」とした。
2. 看護実践能力：「対象の健康への到達、保持、回復のために個人ならびに集団を援助することを看護師の目標としたとき (亀岡ら, 2015)、その目標を達成するための看護職者の知識・技術・態度」とした。
3. 認知的熟慮性：「より多くの情報を収集した上で慎重に物事を判断する認知的判断傾向 (岩男, 2001)」とした。これは、認知的衝動性 (ある程度の情報で早急に物事を判断する認知的判断傾向) と区別される (岩男, 2001)。
4. 自己効力感：「人間の行動に影響を及ぼす要因であり、ある行動を起こす前にその個人が感じる「遂行可能感」のこと (Bandura, 1977)」とした。

研究方法

1. 調査対象者：A大学医学部附属病院の看護職者739名。
2. 調査場所：A大学医学部附属病院。
3. データ収集期間：平成29年7月10日～7月31日。
4. 調査内容
 - 1) 基本的属性について

「性別」、「年代」、「看護職経験年数」、「勤務部署」について調査した。
 - 2) 多重課題遂行に伴う疲労感および達成感や充実感について

「多重課題を遂行する上で疲労感を感じるか」(以下、疲労感とする)、「多重課題を遂行したときに、達成感や充実感を感じるか」(以下、達成感・充実感とする)について、それぞれ「4：とても感じる」、「3：やや感じる」、「2：あまり感じない」、「1：全く感じない」の4件法を用い、調査対象者の主観に基づいて調査した。
 - 3) 尺度について
 - (1) 看護実践能力

本研究では、看護実践能力を亀岡 (2009) が作成した「看護実践の卓越性自己評価尺度—病棟看護師用— (Nursing Excellence Scale in Clinical Practice : NESCP, 以下, NESCPとする)」を用いて評価した。NESCPは、35項目7つの下位尺度から構成され、尺度全体の信頼度係数 $\alpha=0.96$ 、各下位尺度の信頼度係数 $\alpha=0.84\sim 0.90$ であり、尺度全体および下位尺度の信頼性が確保されている。また、看護実践者で構成される専門家たちによる検討やパイロットスタディから内容的妥当性が確保され、看護師799名への調査から構成概念妥当性が確保されている。7つの下位尺度については、以下、「連続的・効率的な情報収集と活用」を【情報収集活用】、「臨床の場の特徴を反映した専門的な知識・技術の活用」を【専門性】、「患者・家族との関係の維持・発展につながるコミュニケーション」を【関係性】、「職場環境・患者個々の持つ悪条件の克服」を【悪条件克服】、「現状に潜む問題の明確化と解決に向けた創造性の発揮」を【明確化と創造性】、「患者の人格尊重と尊厳の遵守」を【尊重と遵守】、「医療

チームの一員としての複数役割発見と同時進行」を【同時進行】と表すことにした。また、NЕСPは、「5：かなり当てはまる」、「4：わりと当てはまる」、「3：少し当てはまる」、「2：あまり当てはまらない」、「1：全く当てはまらない」の5件法で調査するものであり、103点以下を低得点領域、104～140点を中得点領域、141点以上を高得点領域としている。なお、NЕСPは、看護実践能力を卓越性の視点から自己評価するものであるが、実践や研修を通し、NЕСPの総得点および下位尺度得点が上がったという先行研究（亀岡ら、2014）があることからNЕСPの得点は看護実践能力を代替的に表す指標になるといえる。

(2) 自己効力感

本研究では、自己効力感を坂野ら（1986）が作成した「一般性セルフ・エフィカシー尺度（General Self-Efficacy Scale：GSES、以下、GSESとする）」を用いて評価した。この尺度は、再検査法、折半法、内部一致性から信頼性が検証され、他の自己効力感テストとの併存的妥当性および構造的妥当性が検証されている。また、この尺度は、「行動の積極性」、「失敗に対する不安」、「能力の社会的位置づけ」の3因子16項目から構成されている。「はい」を1点、「いいえ」を0点で回答するものであり、高得点であると自己効力感が高いといえる。

(3) 認知的熟慮性

本研究では、認知的熟慮性を滝聞ら（1991）が作成した「認知的熟慮性—衝動性尺度（以下、熟慮性尺度とする）」を用いて評価した。この尺度は、データ収集した施設ごとに信頼度係数 α を算出しており、0.767～0.842と高い信頼性を有している。妥当性については、認知的熟慮性の評価方法の一つである同画探索検査との相関から併存的妥当性が検証されている。また、この尺度は、一次元尺度であり、10項目から構成されている。「4：あてはまる」、「3：どちらかと言えばあてはまる」、「2：どちらかと言えばあてはまらない」、「1：あてはまらない」の4件法で調査するものであり、高得点であると熟慮性が高いといえる。

5. データ収集方法

調査施設の看護部長に研究協力を依頼し許可を得た後、研究者が各部署の師長に研究の趣旨を説明し、調

査対象者への参加依頼文書と調査用紙の配布を依頼した。また、調査用紙は、部外者の立ち入らない看護職者の休息所等に回収箱を設置してもらい、留め置き法で回収した。回答は小袋に入れ厳封の上、回収箱に投函するように説明し、回収箱を研究者が直接回収した。

6. 分析方法

分析には統計ソフトSPSS Statistics 25（IBM社（株））を用いた。

1) 基本的属性、疲労感、達成感・充実感、NЕСPとその下位尺度得点、GSESと熟慮性尺度の得点について集計し、信頼度係数 α を算出した。

2) Mann-Whitney U検定を用い、看護師の疲労感、達成感・充実感によって、NЕСPの総得点および下位尺度得点、GSES、熟慮性尺度の得点に有意差があるかを分析した。また、看護師の疲労感および達成感・充実感については、「とても感じる」と「やや感じる」を「感じる群」、「全く感じない」と「あまり感じない」を「感じない群」として分析した。

7. 倫理的配慮

本研究への参加は任意であり、参加の有無により不利益が生じないこと、調査用紙は個人が特定されないように無記名で回収し、無記名であるため回収後は研究参加を取り消すことができないこと、得られたデータは研究目的以外では使用しないことなどを調査対象者に文書で説明した。また、本研究は、信州大学医学部医倫理委員会（No. 3725）の承認を得て行った。

結果

1. 回収について

739通を配布し、392通（回収率53.0%）が回収され、無回答記載があるもの、手術室など入院環境のない部署等を除外した277通（有効回答率37.5%）を分析した。

2. 基本的属性について

女性248名（89.5%）、男性29名（10.5%）、20歳代154名（55.6%）、30歳代73名（26.4%）、40歳代32名（11.6%）、50歳代18名（6.5%）、看護職者としての平均経験年数および標準偏差は 8.7 ± 8.0 年であった。

3. 各尺度の平均得点および信頼性

NЕСPの総得点の平均得点および標準偏差は、

120.7±17.95点であり、信頼度係数 $\alpha=0.91$ であった。また、下位尺度の平均得点および標準偏差は、【情報収集活用】が16.5±3.12点、【専門性】が16.2±3.39点、【関係性】が19.0±3.05点、【悪条件克服】が16.8±3.20点、【明確化と創造性】が15.8±3.15点、【尊重と遵守】が18.7±2.73点、【同時進行】が17.8±3.54点であった。GSESの平均得点および標準偏差は、6.2±4.08点であり、信頼度係数 $\alpha=0.84$ であった。認知的熟慮性について熟慮性尺度の平均得点および標準偏差は、26.6±4.98点であり、信頼度係数 $\alpha=0.87$ であった。

4. 多重課題に関する質問について

1) 疲労感について

疲労感を「感じる群」は259名、「感じない群」は18名であり、対象者の93.5%が多重課題を遂行することに疲労感を感じていた。

また、Mann-Whitney U検定の結果、NESCPの総得点(U=1528.00, $p=0.015$)、【情報収集活用】(U=1280.00, $p=0.001$)、【専門性】(U=1418.50, $p=0.005$)、【同時進行】(U=1683.50, $p=0.047$)、およびGSES(U=1365.00, $p=0.003$)で有意差が認められ、それぞれ「感じない群」が有意に高かった。熟慮性尺度(U=1842.50, $p=0.136$)では有意差が認められなかった(表1)。

2) 達成感・充実感について

達成感・充実感を「感じる群」は231名、「感じない群」は46名であり、対象者の83.4%が多重課題を遂行することに達成感・充実感を感じていた。

また、Mann-Whitney U検定の結果、【関係性】(U=4188.00, $p=0.022$)、【尊重と遵守】(U=4254.00, $p=0.031$)、およびGSES(U=4292.00, $p=0.039$)で有意差が認められ、それぞれ「感じる群」が有意に高かった。熟慮性尺度では(U=5216.50, $p=0.845$)有意差が認められなかった(表2)。

考察

調査結果から、対象者の93.5%が多重課題を遂行することに疲労感を感じていることが示され、疲労を伴う看護師の業務の一つとして多重課題を示した研究(Steege et al., 2015)との整合性がみられた。また、対象者の83.4%が多重課題を遂行することに達成感や充実感を感じていることが示され、多重課題を魅力的であると示した研究(Forsberg et al., 2015)との整合性もみられた。これらのことから、臨床で働く看護職者は、多重課題を遂行することに、疲労感を感じる一方、達成感や充実感も感じ、日々の業務を遂行して

表 1. 疲労感の違いによる各尺度得点の比較

尺度項目	疲労感を感じる群 n=259 平均点±標準偏差	疲労感を感じない群 n=18 平均点±標準偏差	U値	p値
総得点	120.0±17.72	131.4±18.50	1528.00	0.015 *
情報収集活用	16.3±3.06	18.9±2.94	1280.00	0.001 **
専門性	16.0±3.30	18.7±3.71	1418.50	0.005 **
関係性	18.9±3.06	20.2±2.71	1826.50	0.120
悪条件克服	16.7±3.20	17.8±3.00	1812.00	0.112
明確化と創造性	15.7±3.13	17.1±3.22	1743.00	0.072
尊重と遵守	18.7±2.72	19.1±2.96	2184.00	0.651
同時進行	17.7±3.54	19.7±3.13	1683.50	0.047 *
一般性セルフ・エフィカシー尺度	6.0±4.05	8.9±3.64	1365.00	0.003 **
認知的熟慮性—衝動性尺度	26.7±4.99	24.9±4.62	1842.50	0.136

検定方法: Mann-Whitney U検定

** $p < .01$, * $p < .05$

いることが推察された。

1. 看護実践能力について

対象者全体におけるNESCPの平均得点および標準偏差は120.7±17.95点であり、先行研究（亀岡，2009）で設けられた基準の中得点領域であった。多重課題に疲労感を「感じる群」と比較し、「感じない群」で有意に高かった項目は、NESCPの総得点、【情報収集活用】、【専門性】、【同時進行】であった。NESCPの総得点は、「感じる群」、「感じない群」ともに中得点領域ではあったが有意差がみられ、疲労感を感じない看護職者の総合的な看護実践能力が高い傾向にあることが示された。小口ら（2020）は、多重課題に困難を感じない看護職者の看護実践能力や後述する自己効力感が高いことを報告しており、多重課題の遂行に困難を感じない看護職者ほど疲労感が少ないと考えたとき、本研究との整合性があると考えられた。また、下位尺度については、【情報収集活用】は、効率的な情報収集を行うとともに、わずかな情報、あるいは多様な情報を組み合わせて問題を見極める能力であり（亀岡，2009）、疲労感を感じない看護職者は、疲労感を覚える看護職者に比べ、必要となる情報を効率的に収集し、それを用いた適切な優先順位の選択

を行えていることが示唆された。【専門性】は、臨床の場の特徴を反映した専門的知識・技術を活用し、無駄のない動きや的確な状況判断をする能力である（亀岡，2009）。疲労感を覚えない看護職者は、疲労感を覚える看護職者に比べ、専門的な知識を用い、的確な状況判断を行うとともに、無駄のない効率的な看護ケアを提供していることが示唆された。【同時進行】とは、複数の患者や家族への看護を同時進行し、他のメンバーの動きや経験、能力、状況を考慮しながら自己の役割を遂行する能力である（亀岡ら，2009）。西野（2012）は、多重課題を遂行するには、自身の力量を見極めチームで協働して課題を解決していくことが重要であると言及しており、疲労感を覚えない看護職者は、周囲の状況を把握しながら、自身に課せられた課題を遂行するとともに、ときに同僚の支援を行うことができる看護職者であり、多重課題を一人で抱え込むのではなくチームとして解決していることが示唆された。以上のことから、多重課題の遂行に疲労感を覚える看護職者については、総合的な看護実践能力、特に【情報収集活用】、【専門性】、【同時進行】を向上させるような支援や教育を行うことで、多重課題の遂行による疲労感を軽減できる可能性があると考えられる。多重課題に達成感・充実感を「感じる群」で有意

表 2. 達成感・充実感の違いによる各尺度得点の比較

尺度項目	達成感・充実感を覚える群 n=231	達成感・充実感を覚えない群 n=46	U値	p値
	平均点±標準偏差	平均点±標準偏差		
総得点	121.7±17.22	115.6±20.75	4355.00	0.053
看護自己実践 価値の 尺度卓越性				
情報収集活用	16.5± 3.00	16.0± 3.69	4853.00	0.350
専門性	16.3± 3.40	15.7± 3.31	4575.00	0.135
関係性	19.2± 2.88	18.0± 3.65	4188.00	0.022 *
悪条件克服	16.8± 3.12	15.9± 3.46	4375.50	0.057
明確化と創造性	15.9± 3.10	15.1± 3.36	4664.00	0.189
尊重と遵守	18.9± 2.62	17.9± 3.10	4254.00	0.031 *
同時進行	18.0± 3.51	17.1± 3.66	4477.50	0.089
一般性セルフ・エフィカシー尺度	6.4± 4.03	5.1± 3.24	4292.00	0.039 *
認知的熟慮性—衝動性尺度	26.5± 5.05	26.5± 4.67	5216.50	0.845

検定方法:Mann-Whitney U検定

* p < .05

に高かった項目は、【関係性】と【尊重と遵守】であり、NESCPCの総得点は有意差がみられなかった。【関係性】は、患者・家族との関係の維持・発展に繋げるコミュニケーション能力であり（亀岡，2009），【尊重と遵守】は、患者個々に敬意を払い、患者の意向や希望に最大限の実現に努める能力である（亀岡，2009）。達成感・充実感を感じる看護職者は、多重課題を遂行する中でも、患者や家族の心情に配慮し患者や家族と良好な関係を築ける看護職者であること、患者個々の意向や希望を尊重できる看護職者であることが示唆された。一方、NESCPCの総得点では有意差がみられなかったことから、疲労感に比べ、達成感・充実感に総合的な看護実践能力ではなく、【関係性】、【尊重と遵守】といった個別の能力の向上が重要になると推察された。したがって、達成感・充実感を感じない看護職者に対しては、【関係性】や【尊重と遵守】を向上させるような支援や教育を行うとともに、患者・家族とゆっくり接することができるような環境を、看護管理者やリーダーの役割を担う看護職者が作り出すことが有用であると考えられる。

2. 自己効力感について

対象者全体におけるGSESの平均得点および標準偏差は 6.2 ± 4.08 点であり、看護師を対象に行われた先行研究の 6.1 ± 3.68 （市江ら，2008）と近似する値となった。

自己効力感とは、人間がある行動を起こす前に感じる「遂行可能感」のことであり（Bandura, 1977），自己効力感が高いことで身体疲労が軽減すると示した研究がある（市江ら，2014）。このことから推察するに、疲労感を感じない看護職者は、疲労感を感じる看護職者に比べ、多重課題に対しても遂行可能感を有していることが示唆された。それゆえに、疲労感を感じる看護職者に対しては、多重課題を遂行できるという遂行可能感を高めるためにも、多重課題演習などを用いて、成功体験を得るような機会を設けることが有効であると考えられる。

達成感・充実感については、「感じない群」と比較し、「感じる群」の自己効力感が有意に高いことが示された。前述したように自己効力感はある行動を起こす前に感じる遂行可能感のことであり、多重課題に達

成感・充実感を感じる看護職者は、自身が多重課題を遂行することが可能であると感じていることや、実際の実践においても多重課題を適切に遂行できているからこそ、達成感・充実感を感じない看護職者に比べ、自己効力感が高かったのだと考えられる。

3. 認知的熟慮性について

看護師の認知的熟慮性の有無により、看護師のケアの考え方に違いがあるという報告（渡邊ら，2015）があることから、看護職者の多重課題遂行時の疲労感や達成感・充実感の有無により、認知的熟慮性に違いがみられると考えたが、本研究の結果からは、多重課題遂行における疲労感や達成感・充実感の有無による認知的熟慮性の違いに有意差はみられなかった。しかし、看護師の業務は物事の進みが速い上に予測が難しく、認知的負荷が強いことを示した研究（Kalisch et al., 2010）や、多重課題遂行における困難感と認知的熟慮性の関連を報告した研究（小口ら，2020）があることから、本研究では有意差はみられなかったが、今後、ゆっくり物事を判断する傾向にある者と、速やかに物事を判断する傾向にある者との実践の違いなど、看護職者個人の特性に応じた多重課題の実践を明確にすることで、より効果的な多重課題に対する教育や支援の方法を検討することに繋がると考える。

結論

1. 多重課題遂行において疲労感を感じる看護職者の、総合的な看護実践能力、【情報収集活用】、【専門性】、【同時進行】や自己効力感が低いことが示された。
2. 多重課題遂行において達成感や充実感を感じない看護職者の【関係性】、【尊重と遵守】といった看護実践能力や自己効力感が低いことが示された。
3. 多重課題遂行において疲労感を感じる看護職者には、多重課題演習や日々の臨床での指導を通し、総合的な看護実践能力、特に【情報収集活用】、【専門性】、【同時進行】といった能力および自己効力感の向上を促す支援が有用であると示唆された。
4. 多重課題遂行において達成感・充実感を感じない看護職者には、患者・家族とゆっくり接することができるような環境を、看護管理者やリーダーとなる看護職者が作り出すことが有用であると示唆された。

研究の限界と今後の課題

看護職者の多重課題遂行における疲労感や達成感・充実感に関連する要因は本研究で検討した看護実践能力、自己効力感、認知的熟慮性以外の要因もあると考えられ、その点に本研究の限界があるといえる。今後、本研究で検討した要因以外についても調査を実施することで、看護職者が負担なく効率的に多重課題を遂行するための支援方法や教育方法について、さらなる検討を加えることができると考える。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

付記

本研究は、信州大学大学院医学系研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。

謝辞

本研究にご理解いただき、ご協力いただきました看護師の皆様深く感謝申し上げます。本研究に多大なご指導とご助言を下さいました先生方に、心から感謝申し上げます。

文献

Bandura A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.

Forsberg HH., Muntlin AA., Thiele SU. (2015). Nurses' perceptions of multitasking in the emergency department: Effective, fun and unproblematic (at least for me) - a qualitative study. *International Emergency Nursing*, 23 (2), 59-64. doi: 10.1016/j.ienj.2014.05.002 (accessed 2020-6-9)

市江和子, 水谷聖子, 西川浩昭, 他4名 (2008). 看護師の疲労と生活習慣・自己効力感に関する研究 (第1報) - 疲労と生活習慣・自己効力感の分析 - . *日本赤十字看護学会誌*, 8 (1), 51-59.

市江和子, 西川浩昭, 水谷聖子, 他4名 (2014). 女

性看護師の疲労感・生活習慣・自己効力感との関連性に関する研究. *聖隷クリストファー大学看護学部紀要*, 22, 1-14.

今井尉太, 伊達深晴, 根岸奈緒子, 他1名 (2016). BPSD(中核症状) を伴う認知症高齢者ケアにおける多重業務, 多重課題時の現状と病棟スタッフの判断と対応. *Best Nurse*, 27 (5), 74-70.

岩男征樹, 宮本聡介 (2001). 認知的判断傾向, 山本真理子 (編), *心理測定尺度集 I 人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉* (初版). 株式会社サイエンス社, 175, 東京.

Kalisch BJ., Aebbersold M. (2010). Interruptions and Multitasking in Nursing Care. *Joint Commission journal on quality and patient safety*, 36 (3), 126-132. doi: 10.1016/S1553-7250 (10) 36021-1 (accessed 2020-6-9)

亀岡智美 (2009). 看護実践の卓越性自己評価尺度 - 病棟看護師用 -, 舟島なをみ (監), *看護実践・教育のための測定用具ファイル - 開発過程から活用の実際まで -* (第2版). 株式会社医学書院, 63-73, 東京.

亀岡智美, 舟島なをみ (2015). 看護実践の卓越性に関連する特性の探索 - 臨床経験 5 年以上の看護師に焦点を当てて -. *国立看護大学校研究紀要*, 14 (1), 1-10.

亀岡智美, 岩橋まり子, 藤野みつ子, 他3名 (2014): 「継続的自己評価を導入した看護実践の質向上プログラム」の開発. *国立看護大学校研究紀要*, 13 (1), 1-9.

小西清美, 名城一枝, 仲村美津枝, 他2 名 (2015). インシデント・アクシデント発生時における多重課題業務と月経前期や不定愁訴との関連. *名桜大学紀要*, 20, 29-36.

撫養真紀子, 池亀みどり, 河村美枝子, 他6名 (2014). 病院に勤務する看護師の職業継続意思に関連する要因の検討. *大阪府立大学看護学部紀要*, 20 (1), 29-37.

那須淳子 (2008). 新卒看護師の看護ケア上の多重課題に関する実態調査. *東京医科大学病院看護研究集録*28, 72-76.

- 西野理英 (2012). 多重課題の危険性, 佐藤エキ子 (編), 新体系 看護学全書 看護の統合と実践①看護実践マネジメント医療安全 (第2版). 株式会社メヂカルフレンド社, 104-110, 東京.
- 小口翔平, 山口大輔, 松永保子 (2020). 看護職の業務遂行における多重課題に関する研究—卓越性, 熟慮性, および自己効力感との関連—. 日本看護科学会誌, 40, 74-81.
- 坂野雄二, 東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究, 12, 73-82.
- Steege LM., Drake DA., Olivas M., et al. (2015). Evaluation of physically and mentally fatiguing tasks and sources of fatigue as reported by registered nurses. *Journal of Nursing Management*, 23 (2), 179-189. doi:10.1111/jonm.12112. Epub 2013 Jul 15 (accessed 2020-6-9)
- 滝間一嘉, 坂元章 (1991). 認知的熟慮性—衝動性尺度の作成——信頼性と妥当性の検討, 日本グループダイナミクス学会第39回大会発表論文集, 39-40.
- 東條光彦, 坂野雄二 (1987). Self-efficacyと結果予期が課題遂行に及ぼす影響, 千葉大学教育学部研究紀要, 35 (1), 13-21.
- 渡邊清江, 遠藤善裕 (2015). ターミナル期のがん患者に前向きなケアの考えや感情を有する看護師の傾向, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 13 (1), 39-42.
- 渡邊亜矢子, 宗宮知香 (2018). 業務の効率化に向けた意識の変化. 東海四県農村医学会雑誌, 44, 27-29.

【Report】

A study of factors associated with senses of fatigue and accomplishment / fulfillment concerning multitasking in nursing

Shohei OGUCHI¹⁾, Yasuko MATSUNAGA²⁾

¹⁾ Seisen Jogakuin College, ²⁾ Shinshu University

【Abstract】 Objective: This study aimed to clarify differences in nursing practice ability, self-efficacy, and cognitive reflectivity due to differences in the sense of fatigue and accomplishment / fulfillment concerning multitasking. Methods: We used the Mann-Whitney U test to analyze data from 277 nurses to investigate whether there were differences in the Nursing Excellence Scale in Clinical Practice (NESCP) total and 7 subscales, general self-efficacy scale (GSES), or cognitive reflectivity–impulsivity scale scores due to senses of fatigue and accomplishment / fulfillment during multitasking. Results: Nurses who experienced fatigue due to multitasking had a lower NESCP total scores ($p = 0.015$), ability to gather and utilize information ($p = 0.001$) and GSES scores ($p = 0.003$), while those who experienced a sense of accomplishment and fulfillment were more skilled in respecting patients ($p = 0.031$) and had low GSES scores ($p = 0.039$). There were no significant differences in cognitive reflectivity. Conclusion: This study demonstrated that nursing practice ability and self-efficacy of nurses who were fatigued or did not experience a sense of accomplishment / fulfillment due to multitasking were low. Regarding nursing practice ability, it was suggested that different abilities affect fatigue and accomplishment / fulfillment, and it was speculated that support according to the individuality of the nurses was necessary.

【Keywords】 nursing, multitasking, nursing practice ability

小口翔平
〒399-4117
長野県駒ヶ根市赤穂1694番地
長野県看護大学
Tel: 0265-81-5194 Fax: 0265-81-5194
E-mail:oguchi@nagano-nurs.ac.jp
Shohei OGUCHI
NaganoPrefecture
Nagano College of Nursing
1694Akaho,Komagane,Nagano,399-4117JAPAN
TEL: +81-265-81-5194 FAX: +81-265-81-5184
E-mail:oguchi@nagano-nurs.ac.jp